

S-30-301-5 我が国での今後の放射線教育はどうあるべきか？

○井上 浩義¹

¹慶應大医

平成23年3月に発生した東日本大震災の影響を受けて生じた福島第一原発事故は、我が国にとどまらず、世界の国々に対する影響を及ぼしている。当該原子力事故による、放射性同位元素の飛散、その土壤汚染、海洋汚染、そして、人体に対する被ばくの問題等、多くの問題が、事故後2年を経た現在も解決されていない。このように山積する問題に直面し、国民の多くは放射線利用に少なからぬ不安を覚えるに至っている。そのような中で、今後、放射線は右図に示すように、科学的側面と社会的側面が相伴って階層的に認知されていくことが望まれる。昨年の福島第一原発事故以来、原子力事故に伴う放射線、放射性物質、放射線の人体への影響等は日々の暮らしに密着した知識となり、放射線測定装置さえ、身近な存在となっている。このように、現在では、放射線理解の科学的側面については、事故は促進要因として機能し、社会的側面としては、感情の部分も大きく、事故は理解の阻害要因となっているかもしれない。このような時勢において、国民の科学リテラシーとしての放射線教育がますます重要となる。

